

研究報告

就労する女性がん患者のざ瘡様皮疹による 外見の変化に対するセルフマネジメント

上田 祥子¹⁾, 坂口 美和²⁾, 辻川 真弓¹⁾

1) 鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

2) 三重大学大学院 医学系研究科 看護学専攻

キーワード： 就労する女性がん患者，分子標的薬，ざ瘡様皮疹，外見の変化，セルフマネジメント

要 旨

本研究の目的は，分子標的治療によるざ瘡様皮疹がありながら就労する女性がん患者が行う，外見の変化に対するセルフマネジメントについて明らかにすることである。研究参加者は，分子標的薬によるざ瘡様皮疹がある就労する女性がん患者 4 名とし，KJ 法を用いてデータ収集および統合を行った。統合結果より，【想定外への驚き】【元に戻りたい】【限界】【ネガティブな自分へのとらわれ】【悪化予防への努力】【長い付き合いを受容】【折り合いをつける】【意味づけへの意志】【他者からの誤解と付き合う覚悟】【脱・とらわれ】という 10 のシンボルマークが導き出され，図解全体より，就労する女性がん患者はざ瘡様皮疹により外見が変化しても『見失いたくない自分らしさ』をもち続けようと日々地道な努力をしている姿が浮かび上がった。

I. 序 論

肺がんでは上皮成長因子受容体（Epidermal Growth Factor Receptor, 以降 EGFR と記す）の遺伝子変異が陽性になることが多く、EGFR 阻害薬による分子標的治療を行うと様々な皮膚症状が出現する。その中でも、ざ瘡様皮疹は最も出現頻度が高い皮膚症状であり¹⁾、今なお治療方法の確立に至っていない。また、皮膚症状は治療効果のバロメーターでもあり²⁾、生命に直結しない症状であるため、軽視される傾向がある。EGFR 阻害薬は内服薬であることが多いため治療と就労の両立が可能となるが、ざ瘡様皮疹は顔面に生じることが多く皮膚の変化は目で見えることから、患者は悲観的に捉えて耐え忍び、外見の変化に対する苦痛を抱えながら生活をしている³⁾。一般に外見の問題は社会的な要因などから、女性により深刻な影響をもたらす⁴⁾と言われている。昨今どの年齢階級においても女性の就業率は上昇してきており⁵⁾、がんになっても仕事を続けたいと思う女性も多く、その苦悩は大きいと考えられる。また、がん治療では、治療費だけでなく整容にも費用がかかるため経済的負担を抱えやすい⁶⁾という特徴もある。

こういったアピアランスや就労維持に関わる問題は、第3期および第4期がん対策推進基本計画でも取り上げられ^{7, 8)}、アピアランスケアと就労支援を含む研究^{9, 10)}が報告されてきている。しかし、これらの研究は外見の変化の中でも脱毛に限定するものや、ストーマ造設や乳房切除などに関するものであり、顔面のざ瘡様皮疹に関するアピアランスケアに注目した研究は行われていない。どうしても隠し切れない人目に付く場所の外見の変化は非常に辛く社会生活に大きな影響があるため、ざ瘡様皮疹に関するアピアランスケアに注目する必要があると考えた。また、外見の変化は、前述したように女性により深刻な影響があると考え、分子標的治療によるざ瘡様皮疹がありながらも就労するがん患者の中でも、女性を対象に、自分の外見の変化をどのように感じ、考えているのか、思いを聴くとともに、セルフマネジメントを明らかにすることは、就労するがん患者の支援の一助になると考えた。

II. 目 的

本研究では、分子標的治療を行っている就労する女性がん患者が、ざ瘡様皮疹による外見の変化に対して行っているセルフマネジメントを明らかにする。

III. 用語の定義

就労：勤務形態や仕事内容を問わず、仕事をしていることと定義した。

外見の変化：がんに対する分子標的治療に伴って生じるざ瘡様皮疹による顔面等、外から見える身体の変化と定義した。

セルフマネジメント：ざ瘡様皮疹は、治療終了後すぐに治癒することなく数か月かかって改善する¹¹⁾ことからセルフマネジメントの対象になると捉え、大西¹²⁾の定義より、疾患の管理という個人の目標に向けて、患者が自分のもつ力を活用し、感じ、考え、意図的な取り組み、およびその取り組みによって変化していくプロセスと定義した。

IV. 方 法

1. 研究参加者

研究参加者は、20歳以上の女性で就労している患者で、肺がん（病名告知済み）によりEGFR阻害薬の単剤あるいは他の抗がん剤との併用療法のため外来通院をしており、治療に伴うざ瘡様皮疹が有害事象共通用語規準（Common Terminology Criteria for Adverse Events, 以降CTCAEと記す）v4.0のgrade1以上と診断された者とした。研究参加の条件を満たしている参加候補者を呼吸器センターが併設されている病院のがん看護専門看護師より紹介を受け、文書を用いて説明し同意を得た。

2. 研究期間

2018年1月～2019年3月

3. 研究デザイン

川喜田二郎氏創案の KJ 法¹³⁾を用いた質的記述的研究である。KJ 法は、語られた内容にどのような真実が潜んでいるのかという本質を収集したデータから創造的に発想し、参加者の個別性、固有性を超えて象徴的に明らかにすることができる。本研究は、就労する女性がん患者のざ瘡様皮疹による外見の変化に対するセルフマネジメントの本質を捉える必要がある。そのためには、研究参加者から得られたデータを細分化したり、既成概念にあてはめたりするのではなく、データから創造的に発想できる KJ 法が適切と考え選択した。

4. データ収集（取材）方法および統合方法

1) KJ 法の概要（図 1）

KJ 法は、取材のデータからラベルをつくり、グループ編成によって統合し、図解化、叙述化する。

2) データ収集（取材）方法および統合方法

ざ瘡様皮疹に対して感じたことや考えたこと、ざ瘡様皮疹による外見の変化が日常生活や就労に及ぼす影響、ざ瘡様皮疹やがん治療に伴う身体症状等について半構造化インタビューを行った。その際、フィールドノートに観察した状況を思い浮かべながらできる限り詳細に記載し、インタビューは参加者の許可を得て IC レコーダーに録音した。録音内容とフィールドノートから逐語録を作成し、逐語録より「ざ瘡様皮疹による外見の変化に対するセルフマネジ

メント」に関する内容を 1 枚のラベルに 1 つの志となるように書いた。次に、模造紙の上にラベルを類似性に着目して配置し、囲み線を書き、まとまりごとに名前をつけて全体感を把握した。その後、作成した模造紙を見ながら再度参加者に「ざ瘡様皮疹による外見の変化に対するセルフマネジメント」について非構造化インタビューを行い、確認や修正、追加をした。インタビュー内容は参加者の許可を得て IC レコーダーに録音した。初回のインタビューと同様に、録音内容から逐語録を作成し、その逐語録よりラベルをつくり、全てのラベルの全体感や重複感を確認した。そして、ラベルを段階的に拾い上げて精選した。

ラベルから質の近さを吟味してグループ編成を行ったものに表札をつけ、これらの作業を 10 束以内になるまで繰り返し行った。その際、どのラベルともセットにならないものには●をつけ、●の数はどの段階でセットにならなかったのかを示した。グループ編成をしたラベル群を論理的な説得力をもつように空間配置し、ラベル群にはそれぞれのイメージを端的に表すシンボルマークを与え、関係線を記入した。最終的に、図解全体をよく表すタイトルをつけ、叙述化した。

5. 真実性の確保

本研究に先立ち、KJ 法教育者の研修を受講した。また、1 回目の半構造化インタビューからまとめた内容を 2 回目の非構造化インタビューで研究参加者に提示し、研究参加者の意図することを読み取れているかの確認を行った。KJ 法の全過程において、KJ 法の研究と普及の

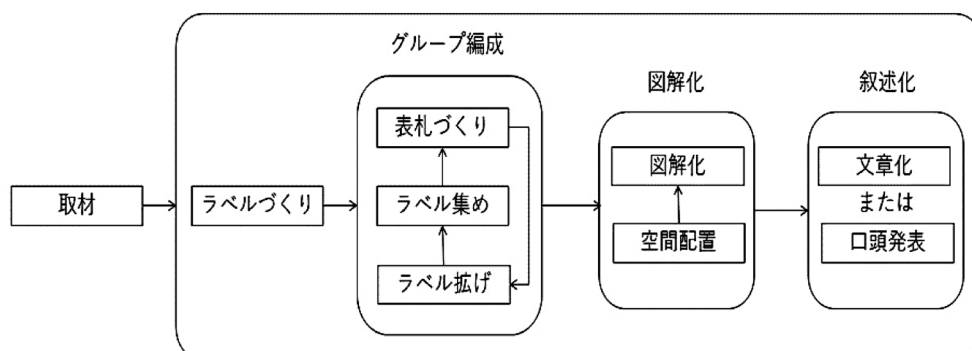


図 1 KJ 法による取材および統合の手順

川喜田二郎（1986）KJ 法—渾沌をして語らしめる—による図を一部修正

第一人者である川喜田晶子氏のスーパーバイズを受け、さらに研究者間で繰り返し検討した。

6. 倫理的配慮

本研究は、三重大学医学部附属病院医学系研究倫理審査委員会の承認（U2018-010）およびデータ収集先の臨床研究倫理委員会の承認（180907-5-1）を得て実施した。研究参加者に対して、研究の主旨や研究参加辞退の自由、個人情報保護の保護、不利益の回避、匿名性の保証、データの厳重な保管と管理、研究結果の公表などについて口頭と文書にて説明し、署名にて同意を得た。また、がんや治療による辛い記憶を思い出す可能性があるため、インタビューの時期はご瘡様皮疹による症状が落ち着いた頃とした。

V. 結 果

1. 研究参加者の概要（表 1）

研究参加者 4 名ともに成人期の女性がん患者であり、分子標的治療をしながら 1 年以上仕事を継続していた。勤務形態は正社員およびパートであり、不特定多数の人と出会うことが避けられない仕事内容であった。

2. データ収集（取材）結果

外来受診の待ち時間にそれぞれ 2 回のインタビューを行い、インタビュー時間は 1 回目平均 39 分、2 回目平均 32 分であった。1 回目と 2 回目のインタビューの逐語

録より合計 234 枚のラベルづくりを行い、その中から 50 枚のラベルを精選した。

3. 統合結果（図 2）

図解化した統合結果について述べる。以下の文章内の【 】はシンボルマークを示す。

EGFR 阻害薬による分子標的治療を行っている成人期の女性がん患者は、ご瘡様皮疹による外見の変化を事前に聞いてはいたものの【想定外への驚き】があり、【元に戻りたい】という思いを抱く。また、この状況が辛く【限界】だと感じることもあり、気持ちが揺れ動く。ご瘡様皮疹が出ていなかった頃の本来の自分らしさを取り戻したいと思い、ご瘡様皮疹による外見の変化を受け入れられず【ネガティブな自分へのとらわれ】となっていく。

一方で、EGFR 阻害薬による分子標的薬を使用すると、ご瘡様皮疹が出ることは必発であるため、ご瘡様皮疹をこれ以上悪化させないように、外見の変化をできるだけ最小限に留められるよう【悪化予防への努力】をがんばる。ご瘡様皮疹は外見に変化を及ぼすものであるが、ご瘡様皮疹が出ることは分子標的薬がよく効いていることを示すため、医療者からはよいことと捉えられてしまうことに葛藤を感じながら、自分らしくあるために何度も医療者に相談するなど【悪化予防への努力】を地道に取り組む。【悪化予防への努力】をする中で、分子標的治療を続ける限り元には戻れないことがわかるようになると、本来の自分であることをあきらめかけ自分を見失いそうになりながらもご瘡様皮疹との【長い付き合いを受容】し、副作用による生活の制約に対しても気持ちの【折り合いをつける】ことで乗り切ろうと受け入れる方向に向かう。また、

表 1. 研究参加者の概要

	年齢	EGFR 阻害薬の 治療期間	勤務形態	仕事内容
A	60 歳代前半	1 年	正社員	自営業での接客
B	50 歳代後半	1 年 1 ヶ月	正社員	会社での事務作業
C	50 歳代後半	1 年 8 ヶ月	パート	ポスティング作業と各家庭への訪問
D	40 歳代前半	1 年 2 ヶ月	パート	小売店でのレジ 工場での軽作業

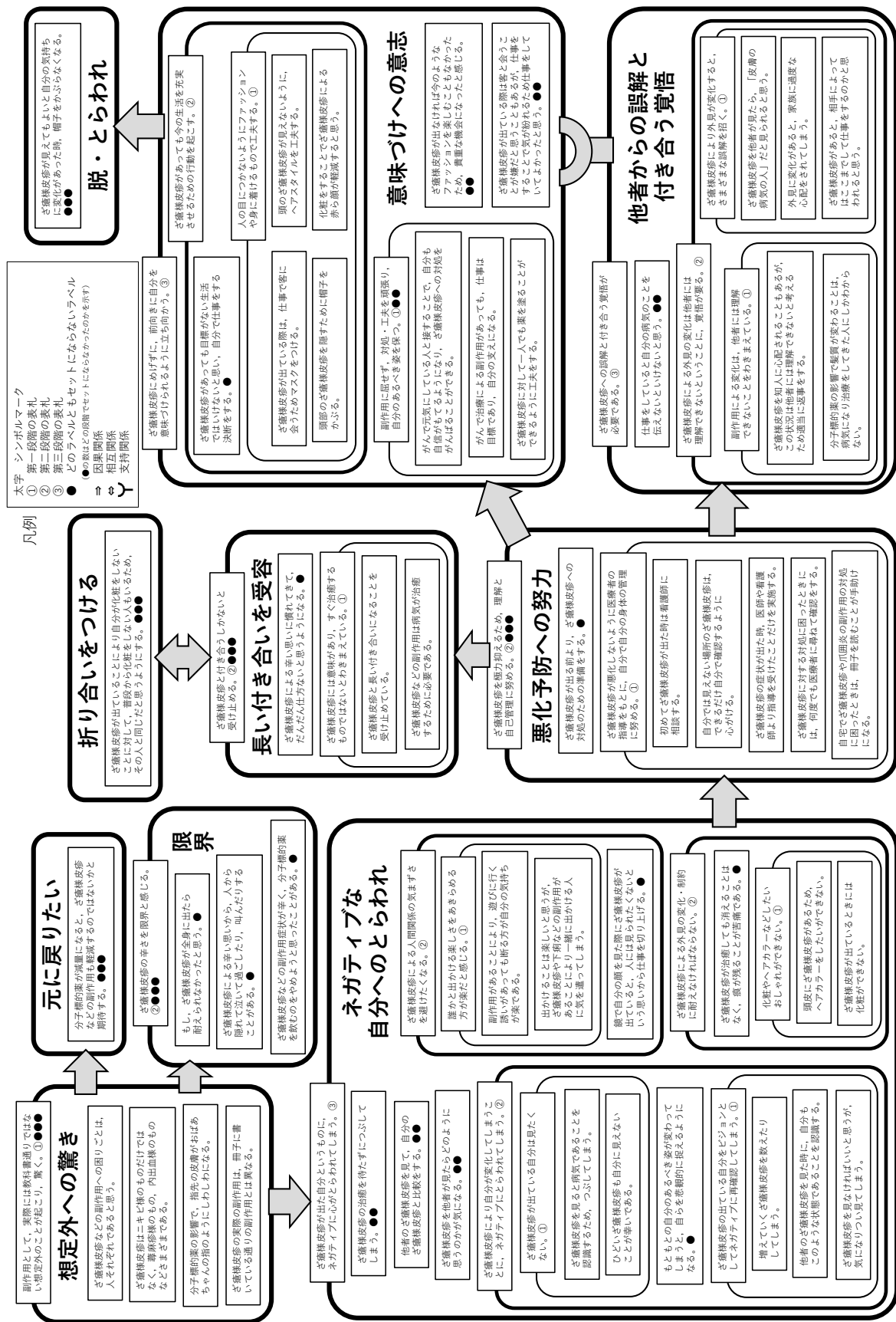


図2 KJ法図解『見失いたくない自分らしさ』

ざ瘡様皮疹と【折り合いをつける】ことで、ざ瘡様皮疹と長い付き合いになることを次第に受け入れていく。

そして、ただ受け入れるだけではない。【悪化予防への努力】を続け、ざ瘡様皮疹が出ていることでネガティブに感じてしまいやすい自分に【意味づけへの意志】を抱くようになる。さらに、他者からはなかなか自分の状況や苦悩が理解されないことに対して、【他者からの誤解と付き合いの覚悟】をするようになる。ざ瘡様皮疹があることを前向きに意味づけ、他者に様々な誤解をされても【悪化予防への努力】を続けようとする覚悟が【意味づけへの意志】を支えている。そして、自分らしさを見失いたくないと思い、自分が自分でいられるように取り組みながら、ざ瘡様皮疹が出ている自分は決してネガティブなものだけでなく意味があるのだと自分を意味づけることができるようになると、【脱・とらわれ】という心のもち方を獲得できる場合があり、ざ瘡様皮疹があってもネガティブな自分にとらわれず、新たな自分として存在することができるようになる。

図解化において、表札やシンボルマークとして表現した言葉の根底には、自分らしさへの強い思いがあると感受し、EGFR 阻害薬による分子標的治療を行っている成人期の女性がん患者は、ざ瘡様皮疹により外見が変化しても『見失いたくない自分らしさ』をもち続けようと日々地道な努力をしている姿が浮かび上がった。

VI. 考 察

統合結果から、セルフマネジメントのプロセスには3つの局面があると考えた。すなわち、【想定外への驚き】【元に戻りたい】【限界】【ネガティブな自分へのとらわれ】をがん治療開始に伴い気持ちが揺れ動く局面、【悪化予防への努力】【長い付き合いを受容】【折り合いをつける】をネガティブな自分があっても地道な努力を続ける局面、【他者からの誤解と付き合いの覚悟】【意味づけへの意志】【脱・とらわれ】を強い決意を抱く局面とした。そして、その根底には『見失いたくない自分らしさ』があると考えた。以下に、これらのプロセスに沿って考察する。下の文章内の【 】はシンボルマーク、「 」は元ラベル、〈 〉は第一段階表札、《 》は第二段階表札、〈《 》〉

は第三段階表札を示した。

1. がん治療開始に伴い気持ちが揺れ動く

EGFR 阻害薬による分子標的治療ではざ瘡様皮疹が必発であり、皮膚症状は抗腫瘍効果と相関するため¹⁴⁾、医師は治療効果があると判断するが、「ざ瘡様皮疹はニキビ様のものだけではなく、蕁麻疹様のもの、内出血様のものなどさまざまである」ため、【想定外への驚き】を感じる。また、医師より治療の中断または減量を告げられた際には、【元に戻りたい】という思いから「ざ瘡様皮疹などの副作用も軽減するのではないかと期待する」ものの、十分ながん治療ができないという Bad News となる。そのため、ざ瘡様皮疹は自分に不都合なものである反面、治療効果を示すものであり、そこには研究参加者の葛藤が存在すると考えられる。「ざ瘡様皮疹による辛い思いから、人から隠れて泣いて過ごしたり、叫んだりすることがある」という体験からもわかるように、研究参加者はこの状態を【限界】と感じており、外見の変化は特に社会的な役割を担う世代では苦痛が大きい¹⁵⁾ことが影響していると考えられる。また、研究参加者は「ざ瘡様皮疹などの副作用症状が辛く、分子標的薬を飲むのをやめようと思ったことがある」と考えるものの、本当に内服をやめてしまうことはがん治療の中断を意味している。つまり、この【限界】の思いの中には、内服をやめる決意は命を放棄することになってしまい、副作用がどんなに辛くても中断することはできない現状があると考えられる。そして、研究参加者は「ざ瘡様皮疹を見ると病気であることを認識するため、つぶしてしまう」というエピソードからもわかるように、がん治療による外見の変化は治療中のことを思い出す契機となるため¹⁶⁾、〈ざ瘡様皮疹が出ている自分は見たくない〉と思っており、【ネガティブな自分へのとらわれ】がある。また、研究参加者は「鏡で自分の顔を見た際にざ瘡様皮疹が出ていると、人には見られたくないという思いから仕事を切り上げる」のように《ざ瘡様皮疹による人間関係の気まずさを避けたい》。外見は自分と社会の接点になるものであり¹⁷⁾、外見の変化をネガティブな体験として捉える患者にとっては人との距離を広げてしまう¹⁸⁾ことを意味している。外見の変化は生活行動範囲を縮小させ、QOL に影響を与える可能

性があり¹⁹⁾、研究参加者が就労等の社会生活を送ることを困難にしてしまう要因になっていることが考えられる。

2. ネガティブな自分があっても地道な努力を続ける

仕事と治療を両立するためには副作用症状がコントロールされていることが重要な要因であると言われており²⁰⁾、【悪化予防への努力】は仕事を続けるために必要不可欠な取り組みと考えられる。また、皮膚障害は患者がケアを生活の中に取り入れることができるかどうかによって症状コントロールに差が出るため²¹⁾、日々保湿・保清・保護というケアを地道に努力し続けることが重要である。研究参加者は、ざ瘡様皮疹による外見の変化と抗腫瘍効果に葛藤を感じながら、【悪化予防への努力】のため「ざ瘡様皮疹に対する対処に困ったときには、何度でも医療者に尋ねて確認をする」というように積極的に関わっており、その行動には、看護師に話を聞いてもらい症状や対処を確認して安心したいというニーズがある²²⁾。また、患者と看護師の関わりの中で行う看護指導はセルフケア意欲の向上に影響するため²³⁾、研究参加者にとって外来受診の短い時間の中で医療者と関わりをもち、セルフマネジメントを継続していく手立てを掴むことは重要であると言える。そして、研究参加者は、〈ざ瘡様皮疹には意味があり、すぐ治癒するものではないとわきまえている〉ようになると、ざ瘡様皮疹との【長い付き合いを受容】する。このような分子標的薬による皮膚症状に対しては重症化を予防し、日常生活と治療の折り合いをつけることが目標であり³⁾、本研究においても研究参加者は【折り合いをつける】ことで現状を受け入れ、セルフマネジメントが可能となったと考えられる。研究参加者は、【悪化予防への努力】においてこれまでの辛い体験を大きく転換しており、地道な【悪化予防への努力】を続けながら、【他者からの誤解と付き合う覚悟】をしたり、【意味づけへの意志】を抱いたりすることで次の局面に進んでいた。この大きな転換は、図解上の分岐点と考えられ、セルフマネジメントの要になるものと言える。

3. 強い決意を抱く

ざ瘡様皮疹は外見の変化として他者から見えることによってさまざまな誤解を受けており、この誤解を解くには

自分ががんであることを他者に伝えなくてはならない。しかし、自分の病気について誰にどこまで話をしたいと思っているかについては、その個人の事情によって異なり¹⁷⁾、がんの公表は就労の際に不利益になると捉えられる²⁰⁾ことから、実際には他者にがんであることを伝えたいが伝えられない思いがある反面、知られたくないという思いも存在すると考える。そのため、研究参加者は他者からなかなか自分の状況や苦悩が理解されないことに対して苦悩しながらも、【他者からの誤解と付き合う覚悟】をし、社会生活を送っていると推察される。しかし、がん患者はざ瘡様皮疹による外見の変化をただ辛い体験として終わらせることなく、【意味づけへの意志】を抱き、〈「ざ瘡様皮疹にめげずに、前向きに自分を意味づけられるように立ち向かう」〉ことをしていた。

Frankl²⁴⁾は、苦悩することができるのは人間だけであり、苦悩することによって人生を意味のあるものにできるとも述べている。本研究においても、研究参加者がこれらの体験に意味を見出すことができると、今までネガティブな自分にとらわれていたが、【脱・とらわれ】という心のもち方を獲得し、ざ瘡様皮疹があっても新たな自分として存在することができるようになるということが示された。さらに、人間は生物学的、心理学的、社会学的な条件を乗り越え、それらを超える力をもっており、人間は自分自身を超越する²⁵⁾ことから、研究参加者もがん治療の副作用による苦悩を乗り越えた結果、【脱・とらわれ】という段階へ自分自身を超越することができるようになると考えられる。また、これらの強い決意を抱く段階になると、「ざ瘡様皮疹があっても目標がない生活ではいけないと思い、自分で仕事をする決断をする」「がんで治療による副作用があっても、仕事は目標であり、自分の支えになる」というように自分自身の仕事への考えが表現されていた。がん治療と就労の両立支援は患者の治療へのモチベーションやアドヒアランスの向上、自尊心の維持に影響する²⁶⁾ため、研究参加者が強い決意を抱く背景には就労しているという事実が大きく関係していたと考えられる。

4. 看護への提言

研究参加者が、ざ瘡様皮疹との【長い付き合いを受

容】したり、【他者からの誤解と付き合う覚悟】をしたり、【意味づけへの意志】を抱いたりすることができたのは、『見失いたくない自分らしさ』のために日々の【悪化予防への努力】をしていたからである。【悪化予防への努力】の局面において、就労する女性がん患者が日々の地道な努力を積み重ねていけるよう支援する必要がある。そして、就労する女性がん患者は『見失いたくない自分らしさ』が根底にありながら、がん治療開始に伴い気持ちが揺れ動いたり、ネガティブな自分があっても地道な努力を続けたり、強い決意を抱いたりさまざまなプロセスを経ていくため、その時々に合わせて支えていくためにも、外来受診時に看護師が関わるができる仕組みづくりが必要になる。看護師は就労する女性がん患者のセルフマネジメントへの頑張りをフィードバックすることや、自分らしさを維持するための支援が求められる。

5. 本研究の限界と課題

本研究は1施設での4名から得られた結果であったため、偏りがあった可能性は否定できない。また、本研究における研究者のデータの読み取りには限界があり、分析する研究者が異なれば異なった結果が生まれる可能性もある。今後は、性別や年齢、勤務形態、仕事内容による特徴など対象の幅を広げることで、がん患者が自分らしく社会生活を送りながら治療を継続していくための支援方法を見出すことができると考えられる。

VII. 結 論

分子標的治療によるざ瘡様皮疹がありながら就労する女性がん患者4名を対象とし、外見の変化に対するセルフマネジメントを明らかにすることを目的にKJ法を用いて分析した。

研究参加者は、ざ瘡様皮疹による外見の変化に対して【想定外への驚き】があり、【元に戻りたい】という思いを抱く。また、この状況を【限界】だと感じ、【ネガティブな自分へのとらわれ】の気持ちを抱き、苦悩する。しかし、自分らしくあるために、ざ瘡様皮疹をこれ以上悪化させないように、外見の変化を最小限に留められるよう

【悪化予防への努力】をがんばる。その中で、ざ瘡様皮疹との【長い付き合いを受容】し、【折り合いをつける】ことで乗り切ろうと受け入れる方向に向かう。また、ただ受け入れるだけではなく、【悪化予防への努力】を続け、ざ瘡様皮疹が出ていることでネガティブに感じてしまいやすい自分に【意味づけへの意志】を抱くようになり、他者からはなかなか自分の状況や苦悩が理解されないことに対して【他者からの誤解と付き合う覚悟】をするようになる。そして、ざ瘡様皮疹が出ている自分は決してネガティブなものだけではなく意味があるのだと自分を意味づけることができるようになると【脱・とらわれ】という心のもち方を獲得できる場合があり、ざ瘡様皮疹があっても新たな自分として存在することができるようになる。以上のことより、研究参加者は、ざ瘡様皮疹により外見が変化しても『見失いたくない自分らしさ』をもち続けようと日々地道な努力をしている姿が浮かび上がった。

謝 辞

本研究に参加してくださいました皆様に心より御礼申し上げます。

文 献

- 1) 山崎直也, 横尾千寿, 市川智里. “ざ瘡様皮疹”. 臨床で活かすがん患者のアピランスケア (野澤桂子, 藤間勝子 編), 南山堂, 東京, 110-120, 2017.
- 2) 第一三共ヘルスケア. がん薬物治療によって起こる皮膚障害 がん治療の皮膚ケア情報サイト はだカレッジ. [cited 2024 May 30]. Available from : https://www.daiichisankyo-hc.co.jp/site_hada-college/hcp/learn/dermatology/reason/.
- 3) 西谷葉子, 湯浅幸代子, 細見裕久子, 北山奈央子, 磯元淳子, 中野宏恵, 他. 分子標的薬による皮膚障害の症状マネジメントの実態. 兵庫県立大学看護学部地域ケア開発研究所紀要. 2017 ; 24 : 93-103.
- 4) 檜垣祐子. 皮膚疾患とQOL・ボディイメージ. 心身医学. 2017 ; 57 (12) : 1215-1220.

- 5) 内閣府男女共同参画局. 男女共同参画白書 令和5年版 第1節 働き方や就業に関する意識の変遷家事・育児等・働き方の現状と課題. [cited 2024 May 30]. Available from : https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r05/zentai/html/honpen/b1_s00_01.html.
- 6) 元井好美, 掛橋千賀子. 外来化学療法を受ける初発乳がん患者の就労上の困難と対処. 日本がん看護学会誌. 2018 ; 32 : 137-147.
- 7) 厚生労働省. がん対策推進基本計画 (第3期). [cited 2019 Jan 6]. Available from : <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/0000196975.pdf>.
- 8) 厚生労働省. がん対策推進基本計画 (第4期). [cited 2024 May 15]. Available from : <https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001138884.pdf>.
- 9) 大槻裕美, 目黒りう, 中山貴博, 内田敦子, 瀧谷樹美. がん治療と就労の両立支援におけるアピアランスケアの意義. 日本医療マネジメント学会雑誌. 2023 ; 24 : 244.
- 10) Keiko Nozawa, Shoko Toma, Chikako Shimizu. Distress and impacts on daily life from appearance changes due to cancer treatment: A survey of 1,034 patients in Japan. *Global Health & Medicine*. 2023 ; 5 (1) : 54-61.
- 11) 根岸恵. “皮膚障害”. 《がん看護実践ガイド》分子標的治療薬とケア (遠藤久美, 本山清美 編), 医学書院, 東京, 199-208, 2016.
- 12) 大西ゆかり. 慢性の経過をたどる患者のセルフマネジメントの概念分析リンパ浮腫のある患者への活用. 高知女子大学看護学会誌. 2010 ; 35 (1) : 27-53.
- 13) 川喜田二郎. KJ法—渾沌をして語らしめる—. 中央公論新社, 東京, 121-339, 1986.
- 14) Wacker B, Nagrani T, Weinberg J, Karsten Witt, Gary Clark, Pablo J Cagnoni. Correlation between development of rash and efficacy in patients treated with the epidermal growth factor receptor tyrosine kinase inhibitor erlotinib in two large phase III studies. *Clin Cancer Res*. 2007 ; 13 (13) : 3913-3921.
- 15) 山口昌子, 小松浩子. がん化学療法を受けた患者の外見の変化とそれに伴う心理的苦痛の実態—システムティックレビュー—. 日本がん看護学会誌. 2018 ; 32 : 170-179.
- 16) Harcourt D, Frith H. Women's experiences of an altered appearance during chemotherapy. *Journal of Health Psychology*. 2008 ; 13 (5) : 597-606.
- 17) 池田真理. 薬物療法を受けるがん患者の外見の変化を支える. 医学のあゆみ. 2015 ; 252 (13) : 1288-1292.
- 18) 森恵子, 三原典子, 宮下茉莉, 寺岡知里, 梅村知佳, 今井芳枝, 他. がん化学療法に伴う脱毛体験が患者の日常生活へ及ぼす影響. *The Journal of Nursing Investigation*. 2013 ; 11 (1-2) : 14-23.
- 19) 廣瀬未央, 藤田佐和. 分子標的治療に伴う皮膚障害のある患者の症状の体験とマネジメントの方略. 高知女子大学看護学会誌. 2015 ; 41 (1) : 120-129.
- 20) 橋爪可織, 岩永和, 井上真由子, 楠葉 洋子. 外来化学療法を受けるがん患者の就労継続を可能にする要因. 保健学研究. 2018 ; 31 : 25-32.
- 21) 野澤桂子. “アピアランスケアとは”. 臨床で活かすがん患者のアピアランスケア (野澤桂子, 藤間勝子 編), 南山堂, 東京, 2-19, 2017.
- 22) 岡野美南子, 川村三希子. 分子標的薬による皮疹を体験したがん患者が受けたセルフケア指導の実態とニーズ. 札幌市立大学研究論文集. 2021 ; 15 (1) : 3-13.
- 23) 今方裕子, 牧野智恵, 北山幸枝, 我妻孝則. 抗EGFR抗体薬投与中患者への看護指導によるセルフケアへの影響. 日本がん看護学会誌. 2020 ; 34 (1) : 165-172.
- 24) Viktor E.Frankl (山田邦男訳). それでも人生にイエスと言う. 春秋社, 東京, 35-73, 2012.
- 25) Viktor E.Frankl (山田邦男訳). 意味による癒しロゴセラピー入門. 春秋社, 東京, 5-64, 2012.
- 26) 坂本はと恵, 高橋都. がん治療を受けながら働く人々が抱える問題とその支援. 日本労働研究雑誌. 2017 ; 682 : 13-24.

— プロフィール —

上田 祥子 鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科・助教 修士（看護学）

〔経歴〕2019年三重大学大学院医学系研究科看護学専攻がん看護学分野 修士課程修了，2021年鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科助教現職。〔専門〕成人看護学，がん看護学

坂口 美和 三重大学大学院医学系研究科看護学専攻・准教授 博士（看護学）

〔経歴〕1999年聖路加看護大学大学院看護学研究科看護学専攻博士前期課程修了，2006年聖路加看護大学大学院看護学研究科看護学専攻博士後期課程修了，2016年

三重大学大学院医学系研究科看護学専攻准教授現職。〔専門〕成人看護学，がん看護学

辻川 真弓 鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科・教授 博士（医学）

〔経歴〕2004年三重大学大学院医学系研究科看護学専攻がん看護学分野 修士課程修了，2004年三重大学医学部看護学科基礎看護学講座助教授，2009年三重大学博士（医学）取得，2010年三重大学医学部看護学科教授，2022年鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科教授現職，三重大学名誉教授。〔専門〕成人看護学，がん看護学

Self-Management for Appearance Changes owing to Acne-like Rash Caused by Molecularly Targeted Therapy in Working Female Patients

Shoko UEDA¹⁾, Miwa SAKAGUCHI²⁾, Mayumi TSUJIKAWA¹⁾

1) Department of Nursing, Faculty of Nursing, Suzuka University of Medical Science

2) Course of Nursing, Graduate School of Medicine, Mie University

Key words: Working Female Cancer Patients, Molecularly Targeted Therapy, Acne-like Skin Rashes, Appearance Changes, Self-management

Abstract

We aimed to determine the self-management of appearance changes in working female with cancer who had acne-like skin rashes caused by molecularly targeted therapy. To this end, data from four working female patients with cancer who experienced these skin rashes, were collected and integrated using the KJ method. From the results, 10 Symbols were derived: “surprise at the unexpected,” “desire to return to normal,” “sense of limitation,” “negative self-concept,” “efforts to prevent deterioration,” “acceptance of a long-term condition,” “coming to terms,” “willingness to find meaning,” “preparedness to handle others’ misunderstandings,” and “de-obsessionalization.” The overall analysis revealed that working female patients with cancer make consistent daily efforts to maintain “a sense of self that they do not want to lose,” despite changes in their appearance due to acne-like skin rashes.